

中学一年のユウとヒロとジュンは仲のよい友達です。三人は中学校に入り、部活動を決める時も「バスケット部に入ろう。」と三人一緒の部活動を希望して入部しました。もちろん、三人全員が運動神経がいいわけではありませんでしたが、つらいときも、きっと三人一緒なら支え合ってがんばれると思っただけです。入部当時、まだ部活に慣れず、くじけそうになるたびにお互いを励まし合いました。先輩とうまくいかず悩んでいる時も、相談することとで乗り越えてきたのです。

でも、このごろユウは悩みを抱くようになっていました。それは、ヒロのことです。

ヒロは、運動神経もよく、技術的な面で同学年の仲間から一目置かれています。でも、最近のヒロは部活後の面倒な片付けなどをさぼって友達とふざけあっていることが多いです。

それだけではありません。この間、ユウはヒロの口から思いがけない言葉を聞いてしまったのです。

「ねえ、ユウ。最近さ、部活つまんなくない？先輩たちばかり楽しく練習して、自分たちはトレーニングや球拾いばかり。ちよつとさぼっていると先輩たちにうるさく言われるし……。こんなはずじゃなかったって思わない？」

「うん。そうだよね。」

思わずユウは調子を合わせていました。これまでもはつきりものを言うヒロと、対立したくないばかりにいい意見を合わせてしまうことが度々ありました。そんな自分の言葉を後味悪く心の中で思い返しているときでした。

「この間さ、ジュンに、最近の自分の態度が悪いって注意されたんだ。ジュンって、先輩によく思われたいから、掃除とかまじめにするし。だから先輩からも気に入られているみたいだよ。ジュンに先輩の悪口とか言ったら告げ口されるかもしれない。……ジュンと仲良くするのしばらくやめてみない？そうしたらそういう自分の態度に気付くかもしれないし。」

ジュンは技術的には人より遅れています。その分、片付けや人の嫌がる地味な仕事を黙々とやることで部に貢献しようとしているのです。それがヒロには面白くないらしいのです。ヒロの言葉はショックでした。それなのに「そんなことしたくない。」と言えない自分がいきました。

その時、先生から集合がかかり、その話はそこで途切れました。が、ヒロは最後にユウにこう言いました。

「わたしたちは友達だよね……。」

ユウは家に帰って一人で今日の出来事を振り返りました。すると、ヒロに何も言えなかった自分に次第に情けなさが入り込んでくるのでした。そして、何度も頭の中を駆けめぐるのは「友達とは？」ということなものでした。

ユウは今まで伝えられなかった思いもこめて、ヒロに手紙を書くことにしました。